

米・露・日の体カテストの位置付けに関する研究

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

指導教官 渡邊 謙

清水 義久

序 章 研究の動機と目的

平成11年度、文部省は34年間継続実施してきたスポーツテストを改訂し、「新体カテスト」の実施に踏み切った。子供たちの体力の低下が問題視されているにもかかわらず、改訂をすることは、体力は落ちても構わないという認識を肯定してしまう危険を含むと思われた。

文部省の改訂理由を整理すると、日本における体力観に変化があったのではないかと考えられた。つまり、これまでとは違った体力が必要になった。あるいは、体力そのもののとらえ方に変化があったとも考えられたのである。そして、この変化には諸外国の影響が少なからずあるのではないかと推察された。

そこで、日本と諸外国におけるこれまでの体力観の変遷を検証、比較研究することによって、体カテストというものの位置付けを明らかにしたいと考えた。

本研究における対象国として、アメリカとロシア（旧ソ連）を選定した。

第I章 体カテスト開発の歴史的背景

アメリカにおいて全国的に普及・実施された体カテストは、クラウスーウェーバーテストに端を発する。以後、AAHPERD（当初はAAHPER）がイニシアティブをとりながら、常に国民の健康（体力の向上を含む）に目を向けてFitness Testは開発されてきている。ただ

し、技術関連フィットネスから、健康関連フィットネスへと大きく変革した。これは、市民主導（民間主導）の取り組みという影響が大きいと考える。

ロシアの体カテストは6回の改訂はあったものの、1931年に開発されたGTOのみであった。強力な国家体制の下で実施され、“労働と国防”のためという目的も、1991年の廃止まで一貫して変わることはなかった。歴史の流れの中で、スポーツ政策としての“競技力の向上”が、副次的に加味されたこともあった。

日本の体カテストも政府主導により行われた。「体力章検定」は、戦争における人的資源の確保のためであった。「スポーツテスト」の設定目的は、主として競技力向上のためであったと思われるが、実際には、テストの普及が第一義におかれたと考えられる。そして、新体カテストは、新しい体力観である「健康関連体力」を加味した構成になった。

第II章 研究者たちがとらえた体力の変遷

アメリカでは、体力を因子分析することによって、その構成要素を決定した。そして、測定項目がそのまま、体力の定義として位置付けられている。また、体力をエネルギー論に重点をおき、さらに健康と関連づけて考える方向に移行したと推察される。

ロシアでは、レスガフトとパプロフの考え方

が脈々と受け継がれてきた。体力を向上させることは、人間の全面的発達につながると考えられた。そして、体力を構成する基本的要素は、中枢神経系を介して互いに関連し合っている。故に、体力を向上させるためには中枢神経（サイバネティックス）系を発達させることがその主たる手段である、と考えられた。

日本は、アメリカの体力のとらえ方に強く影響をうけた。そのような中で、福田と猪飼の、体力を防衛体力と行動体力とに分けるという基本的構想が、今なお大きな礎として受け継がれている。

第三章 体力テストに見る体力観の反映

1. テストの項目構成

アメリカでは懸垂による筋力測定が、ロシアではスポーツ種目が、日本では走・跳・投という運動能力項目が他国と異なって継続されてきた。しかし、国家管理下でテストを行っている日口は、民間主導で行っているアメリカと比較すると、項目の継続性が重視されてきた。

テストの年齢区分からは、アメリカに比較すると日口は項目内容が細分化されていることがうかがわれる。これは、スキルをともなう項目を重視しているためであると考えられる。

アメリカはテスト項目を技術関連から健康関連に大幅に変更した。よって、調整力を軽視する一方、柔軟性を重視した。ロシアは調整力を重視し、柔軟性を軽視する従来からの構成項目の取り扱いに大きな変容はみられない。日本はアメリカに習って柔軟性を重視するようになったが、調整力もまた重視しているといえる。

また、種目数は3カ国とも減少傾向にある。

2. テストの有効性

測定者・被測定者の動機付けとなるテストの

明確な目的が必要であると考えられる。特に、教育システム、あるいはプログラムにいかに関位置付けられているかが大きな影響をもたらすのではないかと考える。

加えて、目的に相応しい評価も必要であると考えられる。体力観が変われば、体力テストの項目や評価も見直されるべきであると考えられる。

終章

1. 結論

歴史的にみて、各国の体力テストの目的を比較すると、米口の体力テストのそれは一貫しているのに対し、日本においては、その時代によって大きく変化してきたといえる。

また、各国の体力観の違いは、その国のおかれた立場によって違うが、研究者（特に開発当初）の体力のとらえ方に影響を受けたのではないかと考えられる。

実際の体力テストにおいては、その実施・普及にどれほど国（政府）が関わるかにより、実施形態およびその位置付けに大きく違いがみられる。

2. 課題と展望

体力観、テストの目的、評価などから、各国のテストの位置づけを探ったが、目的を十分に果たしているとはいえないように思われる。

「新体力テスト」は単に『新しくなった体力テスト』ではなく、『新しい体力観に基づいた体力テスト』であるにとらえるべきであろう。しかし、検討すべき余地はまだ残されているのではないと思われる。今後、真に求められるであろう体力を測定できる（テスト）方法、また、テストを教育システムあるいはプログラムの中にどう位置づけるべきかを研究する必要があると考えられる。